



# アイガモ

助けてくれる  
時期

春	夏
冬	秋



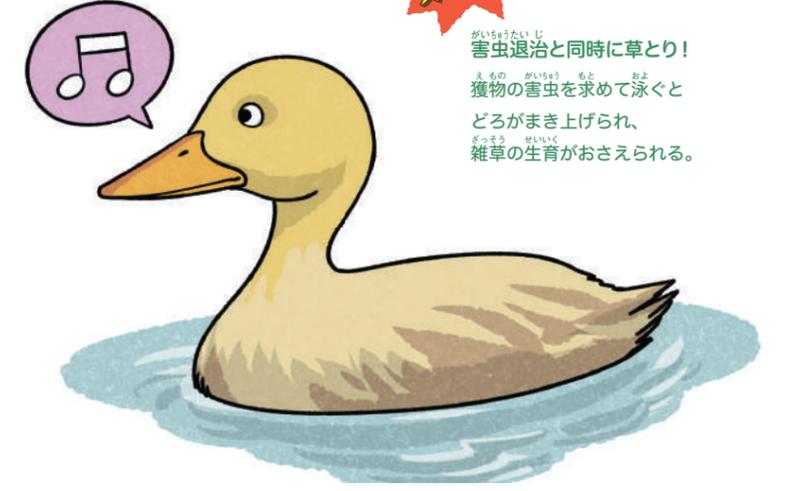
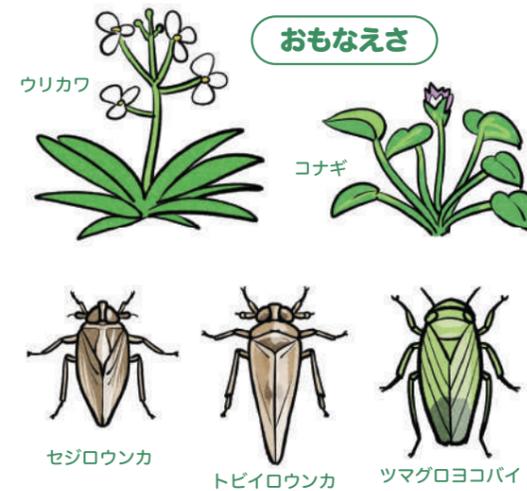
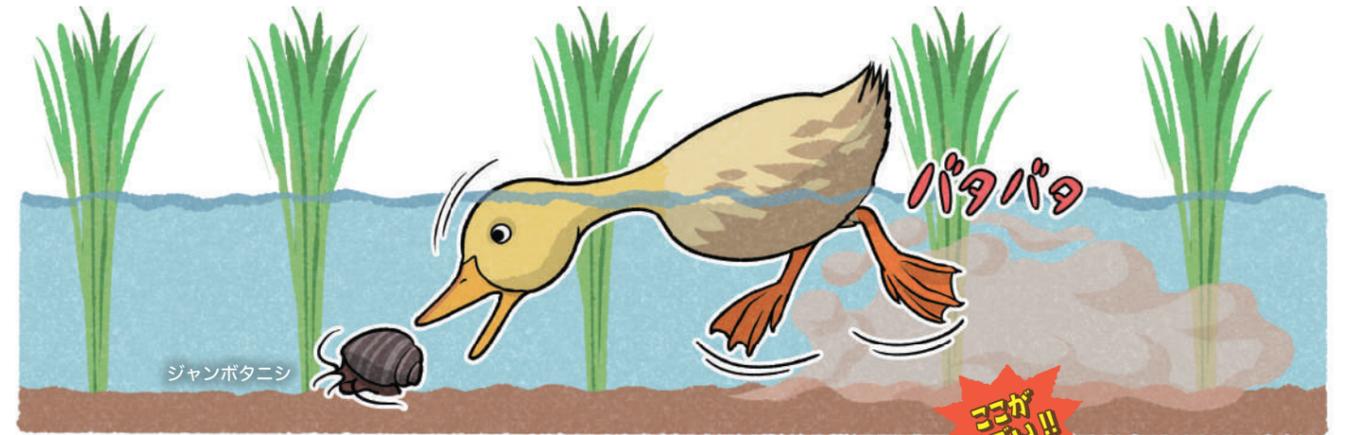
雑草ムシャムシャ

害虫パクリ。

## スゴわざ ご飯もおかずも同時にゲット

アイガモは春、ひなのうちに人が田んぼに放す。田んぼに入るとウンカ、ヨコバイなどの害虫や雑草を食べ、農家がきらうジャンボタニシもえさにする。そうしたえさを求めて動きまわると水がにごり、光がささげられることで雑草の生育が悪くなった

り、抜けて浮き上がったりする。えさを食べればふんを出す。するとそれが肥料になって、稲がよく育つ。成長したアイガモは最終的に、食肉として人間が食べる。ご飯とおかずが同時に得られるのが「アイガモ農法」のすばらしさだ。



### データ

- 分類** ● 鳥類 カモ目
- 分布** ● 全国各地
- 環境** ● 水田
- 食べ物** ● ウンカ、ヨコバイ、ジャンボタニシ（スクミリンゴガイ）、雑草など

### 生態

- 全長** ● 導入時は体長20cmぐらい。成鳥は50~80cm
- 卵は28日がかかって、ひな鳥になる。
- 田植えをしてから7~10日後、まわりを困った田んぼに生後2週間前後のひな鳥を放す。
- 2か月ほど放し飼いにし回収し、食肉にする。飛べないアイガモが多く、放し飼いにしてもまずにげない。

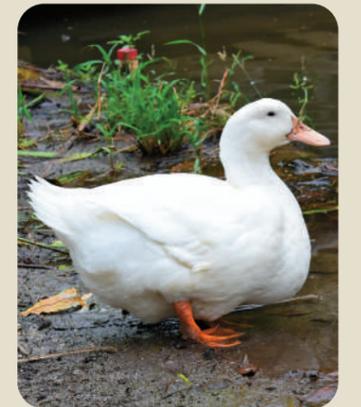


### 両親はマガモとアヒル

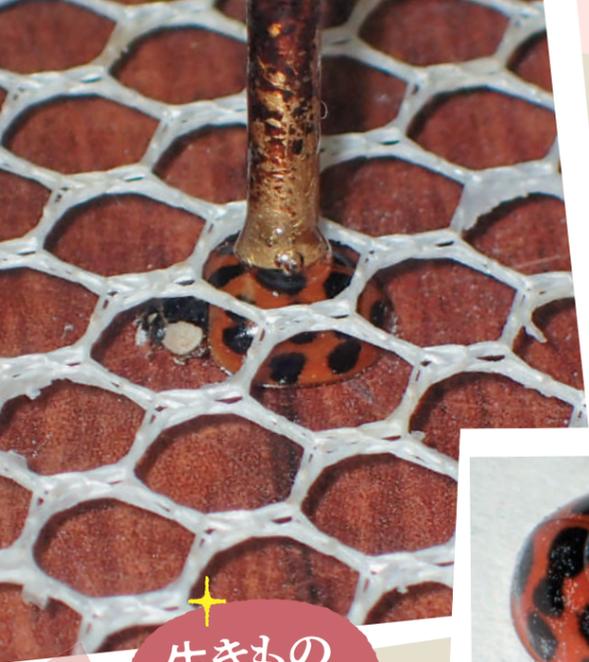
アイガモは自然界に存在しない。野生のマガモとアヒルを親にして生まれた鳥だからだ。しかし、アヒルはマガモの改良種なので、大きな意味ではマガモの一品種となる。カルガモとアヒルの雑種も「アイガモ農法」に用いることがある。農業以外では、狩りのときのおとりに利用される。近年は野生化したアイガモがふえ、ほかの野生ガモと血がまじることが心配されている。



マガモ



アヒル



### 1 はねをとめる

テントウムシの背中の下には、空を飛ぶためのはねがある。しばらくはハウスにとどまっておアブラムシを退治してほしいので、はねが開かないように樹脂でとめる。



### 2 袋につめて出荷

はねをとめたテントウムシは、パラフィン紙でつくった袋に入れて農家に届ける。針なしホチキスでとめているので袋は自然に分解し、ハウスには何も残らない。



生きもの  
パワー  
ぜんかい!!

# 飛ばないテントウムシが イチゴを守る!!



## ハウスにとどまり大活躍

野菜のハウス栽培でやっかいな害虫のひとつがアブラムシだろう。放っておくと短期間でおどろくほど増え、集団で作物の汁を吸う。

そこで活躍するのがテントウムシだ。とことこ歩いてアブラムシを見つけ、次から次へと食べていく。

ところが、テントウムシを農業で利用しようとする、と、ちょっとだけ問題がある。はねがあるから、どこかへ行きたいと思ったら、勝手に飛んでいく。そうになると、栽培する作物のアブラムシが退治できない。それならと、遺伝的に飛ぶことができないテントウムシを大量に増やして販売する会社もあらわれた。

千葉県立農業大学校は、人工的な「飛ばないテントウムシ」を考えた。背中を樹脂でとめ、その下にある後ろはねが開かないようにする。樹脂は2か月もすれば自然にはがれるから、はねが開かない一時期だけ、ハウスの中でアブラムシをやっつけてもらおうという発想だ。一時的にテントウムシをコントロールすることから、商品名は「テントロール」となった。

## 手間いらずで自然にやさしい

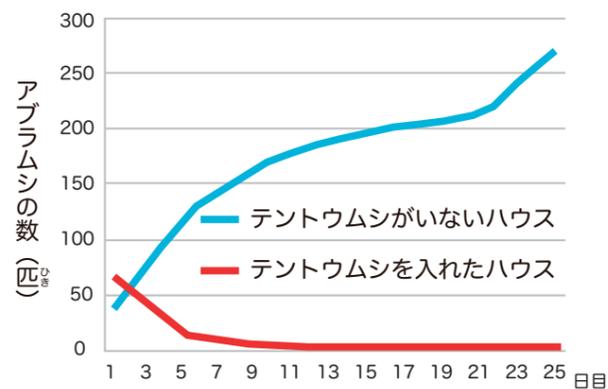
「テントロール」にするのは、ナミテントウとナナホシテントウだ。どちらもパラフィン紙を針なしホチキスでとめた袋に、10匹ずつ入れて販売する。農家はその袋をハウスに持ちこみ、袋の口を開くだけ。ア

### 3 イチゴハウスで大活躍

農家に届いたテントウムシは、ハウスにとどまってアブラムシを食べる。アブラムシが多いところに集中的に使うのが、効果的で上手な使いかただ。



## 飛ばないテントウムシの効果



何もしいイチゴのハウスでは、アブラムシが日を追って増えていく。飛ばないテントウムシを1㎡当たり2匹放すと、1週間ほどでいなくなる。(清水敏夫「飛翔制御したテントウムシによる病害虫防除の試み」科学技術教育 通巻230号)

テントウムシさん、  
ありがとう!



飛ばないテントウムシを放したハウスで育てたイチゴからつくったジャム。テントウムシがいれば農薬を使わないため、安全性がアピールできる。(清水敏夫提供)

わたしも  
取り組んで  
います!

## アブラムシの増殖を おさえられます!

販売が始まったころから「テントロール」を使っていますが、アブラムシを減らすというより、被害が広がらない感じですね。だから、利用は大成功です。

毎年3月、アブラムシが発生したころに300匹ほど、ハウスに放します。入り口とか奥のほう、両サイドで増えやすいから、そんなところをねらってスポット的にね。それから収穫が終わる5月半ばまで、ハウスで働いてくれますよ。自然繁殖もしているよう

千葉県東金市のイチゴ農家  
土橋三良さん



ブラムシが多いところをねらい、1㎡当たり2匹を目安に放すのがコツだという。

生きているテントウムシに働いてもらうわけだから、「テントロール」を使うハウスでは基本的に、農薬が使えない。また、はねが広げられないため、ひっくり返ると自力では起き上がれない。ハウスには、転倒時につかまる稲わらや麦わらを敷いておく。

「テントロール」の販売は2018年に始まったばかりだが、これまでにイチゴ、ナス、ピーマン、バラなどで使用例がある。本来なら農薬がまかれて死んでいたかもしれないテントウムシの命を救い、その害虫駆除パワーを一時的に利用する。テントウムシを入れるパラフィン紙の袋は自然に分解する。なんと環境にやさしい天敵利用法といえそうだ。

クローズアップ!

# 「生きもののブランド米」ってどんなもの?

全国各地で、田んぼに生息する生きものの名前をつけた米が売られている。これらは「生きものブランド米」と呼ばれる。

農業の使用をひかえ、自然の生きものがくらしやすい環境で育てた安全・安心の米として人気が高い。おもなものをみてみよう。



## 佐護ツシマヤマネコ米

長崎県の対馬にだけ生息するツシマヤマネコ。田んぼでえさをとって子育てをするため「田ネコ」とも呼ばれる。この米を生産する農家の人たちは、できるだけ農業の使用を減らし、水田魚道の設置や田んぼの生きもの調査などにも取り組んでいる。(佐護ヤマネコ稲作研究会提供)

## 魚のゆりかご水田米

琵琶湖からさかのぼる魚が産卵し、稚魚の育つ田んぼで作られる米。水田魚道を設置し、除草剤を使用しない田んぼで栽培される。この「魚のゆりかご水田」でおこなわれる稲作などが、「森・里・湖に育まれる漁業と農業が織りなす琵琶湖システム」として2022年に世界農業遺産に認定された。

(パルライス滋賀提供)



長崎県  
対馬市



## コウノトリ育むお米

国の特別天然記念物・コウノトリの生息環境を守るために生まれたブランド米。カエルやドジョウなど、コウノトリのえさとなる生きものが育つ田んぼにするため、「農業に頼らない強い米づくり」を合言葉に栽培されている。(たじま農業協同組合提供)

石川県  
小松市



## 蛍米

ホタルが飛びかう山あいの田んぼで栽培される。一般的な米づくりよりも農業や化学肥料の使用を減らしている。昼と夜の気温の差が大きいため、味のよい米となる。

(小松市農業協同組合提供)



新潟県  
佐渡市

宮城県  
大崎市

神奈川県  
茅ヶ崎市

千葉県  
東金市



## 湘南タゲリ米

絶滅が心配される渡り鳥・タゲリの生息環境を保護するために生まれたブランド米。農家と市民グループが協力し、水田魚道やビオトープの設置などに取り組んでいる。

(三翠会提供)



## ふゆみずたんぼ米

冬水田んぼとは、冬の間も水をためた田んぼ。冬場もイトミヅなどの生きものが増え、渡り鳥のえさ場となる。鳥たちが雑草を食べるので草とり効果が期待でき、ふんは肥料になる。この米の産地である「蕪栗沼・周辺水田」は、水鳥の保護を目的としたラムサール条約に登録されている。

(たじり穂波公社提供)



## トウキョウサンショウウオ米

2022年に発売された新しいブランド米。絶滅が心配されるトウキョウサンショウウオの生息地が環境で栽培されたおいしいお米です。

(千葉県立農業大学校提供)



## 朱鷺と暮らす郷

日本の国内産トキは狩猟や農業散布などで数が減り、2003年に絶滅した。その後、トキが再びすめる環境をつくるために立ち上げたブランド米。トキのえさとなる田んぼの生きものを育てよう、生物多様性に配慮した農法で作られる。

(佐渡市提供)

